

**Canales prehispánicos en áreas urbanas:  
Problemas y posibilidades del canal Lati en Lima, Perú**

**SAUCEDO SEGAMI Daniel Dante (Universidad Ritsumeikan)**

Como muchas ciudades modernas de América Latina, la ciudad capital de Lima (Perú) ha sufrido un rápido crecimiento en las últimas décadas, principalmente por el fenómeno de migración interna desde las zonas rurales a las urbanas en búsqueda de un mejor futuro. Este fenómeno ha llevado a un cambio drástico en áreas que anteriormente eran dedicadas a la agricultura o la ganadería para ser utilizadas como zonas residenciales, ya sea de forma planificada o desordenada.

En el caso del distrito de La Molina, al este de Lima, se dio un proceso de urbanización planificado durante los años setenta y ochenta, reutilizando terrenos de antiguas haciendas ubicadas allí. Este proceso, sin embargo, se consideraba la destrucción de restos arqueológicos existentes para facilitar la expansión de terrenos o reutilizar los espacios como áreas verdes. Un destino diferente siguió a los diversos canales de regadío que se distribuían en la zona, alimentados por el antiguo canal prehispánico conocido como “Río Lati” que se origina en el río Rímac. Esta red de canales, llamados comúnmente “acequias”, tenían una imagen muy negativa debido a que en las zonas urbanas se consideraban como espacios sucios donde la gente tiraba sus desechos. Por ello, muchos de estos canales fueron cubiertos durante el proceso de urbanización, y en el presente es difícil observarlos a simple vista.

En esta ponencia, presentaremos la historia de este canal y su situación actual, analizando cómo su valor ha ido cambiando en el tiempo. Además, plantearemos algunas posibilidades de uso a futuro en beneficio de las generaciones futuras, tomando como comparación otros casos en Lima y en otras ciudades.

## ツトゥヒル・マヤの征服と布教

桜井三枝子（京都外国語大学）

### 1. アルバラード軍によるツトゥヒル・マヤの征服

16 世紀初頭のグアテマラ・マヤ地域では、キチェ、カクチケル、ツトゥヒルの三王国が互いに反目し覇を競っていた。まず、スペイン軍はカクチケルを味方につけ、ウタトランのキチェ王国を滅ぼし、続けてツトゥヒル王国を征服した。次に滅ぼされたキチェとツトゥヒルがアルバラード軍につき、カクチケル・マヤの王城（テクパン）を陥落させた。スペイン軍の圧倒的勝利であったが、注目すべきは兵糧や重い銃器類を運搬しスペイン軍に参軍したメキシコ中央高地のトラスカラ人やオアハカ先住民たちの存在である。あたかも少数のスペイン軍精鋭だけでグアテマラ・マヤの諸王国を征服したかのような「物語」が語られてきた。アルバラードはアティトラン地域をサンチョ・デ・バラオマと二分割し死後（1542 年）、その領地は王室に返還された。以後バラオマー族は三代にわたり当地方のエンコミエンダを所有した。

### 2. フランシスコ会によるカトリックの布教

初代グアテマラ総督アルバラードはスペイン王室の直轄領として、その「首都」をサンティアゴ・デ・グアテマラ市（現アンティグア市）に設置し、現中米五カ国を総監し、フランシスコ・マロキン神父をグアテマラ聖堂の初代司教に任命した。メルセデス会(1536 年)、ドミニコ会(1539 年)、フランシスコ会(1540-41 年)などの修道院が設立された。ツトゥヒル・マヤの主邑サンティアゴ・アティトランはフランシスコ会の管轄となり(1550 年)、カトリック教会が建設され、コフラディア組織が設立された(1585 年)。この組織はグアテマラで定着し 17 世紀を通じて急増し、遠隔地サンティアゴ・アティトラン市でもコフラディアとエルマンダーが創設された。先スペイン期にマヤの諸神に奉納された歌・踊り・飲酒・薫香などの儀礼は、18 世紀になると、スペイン・カトリックの聖人像に替わった。サンティアゴは対イスラムと戦ったスペインの守護聖人であり、アティトランはトラスカラ語で「湖のそば」を意味すると言う。

## イエズス会サンタ・ロサ布教区（現パラグアイ）洗礼簿（1754-1764）

## —受洗者の母親の所属カシカスゴに関する試論—

武田和久（明治大学）

洗礼簿（libros de bautismos）とは小教区（parroquia）の司祭（párroco）が教区民に授けた洗礼記録を記した帳簿であり、婚姻簿（libros de casamientos）や埋葬簿（libros de defunciones）とあわせて小教区帳簿（registros parroquiales）と総称される。洗礼簿の記載事項については地域や時代ごとに違いがあるものの、基本的には洗礼を受けた司祭の名前、洗礼が実施された年月日、受洗者の氏名や年齢、受洗者の父母の氏名、洗礼に立ち会った代父母（padrino, madrina）の氏名が書かれる。こうした事項に加えて、スペイン領アメリカで作成された先住民を対象とした洗礼簿の場合、受洗者のエスニック・グループ（grupo étnico）が記載されることがある。

本報告で主たる分析対象とするサンタ・ロサ布教区の洗礼簿とは、グアラニ語系先住民のキリスト教化を目的としたイエズス会士がラプラタ地域で 1609 年から 1767 年にかけて管理・運営した布教区（misión, reducción）の一つサンタ・ロサ（現パラグアイ）で記録された帳簿であり、1754 年から 19 世紀にかけての記録が現存する。とりわけ興味深いのが 1764 年までの記録であり、この 10 年間、受洗者の代父の氏名ならびに受洗者の母が所属したエスニック・グループがほぼ漏れなく記載された。なお布教区の文脈でエスニック・グループとはカシカスゴ（cacicazgo）と呼ばれる集団を指す。

本報告では受洗者の母が所属したカシカスゴにかかわる情報がサンタ・ロサ布教区で洗礼が行われるたびに記録されていた理由を、洗礼簿ならびに住民名簿（padrón）との比較分析をつうじて探りたい。

## 故郷を去る人びと、「故郷」に集う人びと —植民地期メキシコにおける副業とソシアビリテ—

和田杏子（立教大学）

植民地期メキシコのインディオ村落共同体の住民については長らく、その多くが、農民として自身の帰属する村の共有地や近隣のアシエンダで農牧業に従事し、基本的には生まれた村でその生涯を終えるものと考えられてきた。だが、近年の研究では、自主的に鉱山やアシエンダへ移り住む者の存在や、村外婚などにより自分の生まれ故郷を去る人々の存在にも目が向けられてきている。

本報告では、18 世紀イスキルパン行政区で起こったマペテ教会堂再建に関わるお布施の管理を巡って起こった訴訟記録から得られる、訴訟関係者の出身村落や職業などの情報を基に、当時のイスキルパンにおいて、少なからぬ人々が多様な社会的結合関係を活用し、自分の村の外で収入を得ようとしていた様を紹介する。

18 世紀前半のメキシコでは、未課税の銀の流出阻止を目論む王室の政策により銀の採掘コストが下がったことで、二度目の銀ブームが起こっていた。この景気回復と、インディオが旧大陸起源の病原菌に対する耐性を獲得したことによる人口の回復は、穀物生産力の増大につながり、インディオが農閑期以外にも自分の村の農地を耕さずに特産品の売買や運送業などの副業に従事することを可能ならしめたと考えられる。

教会堂再建とその運営の進展は、お布施として農作物や家畜、ひいては貴金属がその場所に集積することを意味していた。当該事業に関わっていたインディオの中には、本来平民には所有が許されていない馬を持っていたり、個人で役畜を放牧したりする者がおり、彼らの多くが、運送業者や小商人としての才覚を發揮しながら、当該事業の役職を兼任していた様が窺える。彼らは強かにも、現地のスペイン人や村役人層、近隣鉱山やメキシコ市に移住したインディオからの支援を獲得し、メキシコ市での訴訟を闘った。そして、多くの場合彼らは、血縁関係や婚姻関係に頼ってビジネスを行いつつ、周辺の村の役人層にも取り入って自分たちの子孫の繁栄を目指した。

流動性に乏しい故郷を飛び出し、村の外で様々な職能を得た彼らは、同業者仲間新たな集団を形成し、自分たちの「故郷」を創ろうとした。だが、物理的な「故郷」の実現には、既存の利権に配慮せざるを得なかったようである。